

## 三島由紀夫『禁色』が舞踏に与えた影響

### 美学理論による《身体》の研究

#### 序論

現在、身体表現はカルチュラル・スタディーズの中でも最も重要な科目の一つである。《身体》は、自分自身を表現したり、視覚化したりするのに最も適したものである。身体は私たち自身から切り離せないものであり、自分自身を表すのに無限な可能性を秘めている。身体は人の一大プロジェクトといってもいいだろう。独自のスタイルを確立するために、身体はバラバラにされ、再構成され、開発され、探求され、化粧され、痛めつけられ、苦しめられ、鍛えられる。

日本では、身体を語る言語として使う「舞踏」という芸術がある。ジャンルとしての舞踏は、それほど古くない。1960年に日本で現れ、前衛芸術とよばれている。草分けの一人、土方巽は三島由紀夫が書いた「禁色」を基に初めて舞踏を演じた。その演技は身体に不自然な踊りと音楽を取り除いた。その作品は二人の踊り手、土方と大野義人が演じた。後々「暗黒舞踏」といわれたその踊りは「舞踏」といわれるようになる。舞踏の踊り手、岡村ただしはこのように語った、

はじめに、舞踏に固有のものは何よりも身体のありようである。すなわち、いかに身体が特定の空間に臨在し、いかに所作をなすか、その独特の様相が舞踏にとって要となっている。舞踏はいうまでもなく身体表現によるアートであるが、基本となる身体のありようが他のジャンルでのそれと本質的に異なっているのだ。

舞踏という芸術は身体を探究の草分けとして受け入れられる。舞踏は固定的な踊りではない。その時始まった舞踏は新たな芸術の一つとなる。1970年代、舞踏は

外国にまで広がった。今も自分を表現するための基本の手段として、多くの劇団が練習して使っている。

『禁色』の物語と舞踏には同じ部分がある。特に身体が存在。両者はともに *“beauty and ugliness”, “young and aging”, “life and death”*, という三つのテーマの二元論を持っている。筆者は『禁色』にあった身体の描写とその哲学こそが舞踏の基礎であり美意識であることはすでに証明した。

## 本論

*“Beauty and ugliness”*  
では、美について『禁色』は『禁色』ならではの視点を持っている。一般に美の感覚は少々ありきたりなところがある。逆に、醜悪は人生に表現できないものの固まりのようなもので、深い意味を持っている。舞踏と同じく、舞踏の踊り手の美学は醜い美学である。舞踏は現代バレエの美学だけでなく、身体の理想的な動きさえも拒絶する。彼らが見せたいのは野心、脆さ、必滅、死、そして身体の切なさである。

*“Young and aging”*  
における、『禁色』の登場人物、檜俊介は有名な作家である。彼は老化を避けるほどまでに老化を憎む。舞踏も同じく、探求するしぐさは進歩の動きである。生まれてから、大人になるまでである。そのあと老化の表現として地に落ち、やがて死に至る。この進歩の動きは、ミニマリストの動きとして演じられた。舞踏は、『前へ進むことを抑えられ、虐げられた状況をあらわにする』ための身体コードを見つけ出すための動きとして解釈することができる。自分自身の内面の変化と、自分自身の外見に起こる、さまざまな変化に直面した人間の問題を表現している。それらは元々、生まれて、大人になって、死に至る現象から始まったものである。

“*Life* *and* *death*”

では、物語が俊介に向ける時のように、ある登場人物は死に強迫観念を持ち、死は生きることよりも強く感じると考えている。死に対しての自覚がないと、生きることにさえ自覚しない事もある。舞踏も生と死の融合である。簡単に言えば、死の体性は落ちるか浮くか、二つに一つである。しかし舞踏では、再び立つことさえもできる。

『禁色』と舞踏は「恐怖の芸術」と言ってもいい。恐怖は人を混乱させ、魂を燃え尽きさせ、崩壊させるために使われる。しかし、芸術は崩壊した状態と不安定な状況のための精神的な恐怖にもなりえる。激しく揺れることで、やがて一つの丈夫な柱となり、読者に調和をもたらす。

## 結論

日本では、舞踏と禁色はそれぞれ創作的な作品で1960年代に生まれた。当時の作品のほとんどが戦争のトラウマから解き放され、新たな人道主義を探していた姿を映し出していた。日本の芸術家達も現代日本人の心理状態を作品の中心に取り上げた。例えば孤独、悲劇的、ときには破壊的なテーマもある。死んでしまうと、人は巨大な闇に包まれるように。まるで現代読者と一緒に、同じ苦しみを分けあいたいかのように。

結局、『禁色』と舞踏の創作的関係は、作者にとって、作品はカタルシス、そして魂の開放の形でもある。おかげで、暴力の種は芸術文化の破壊の形ではなく、建設的でよい方向へ文明を前進させるエネルギーとなる。読者にとって、創作的な怒りは社会批判としてのしむことができる。なぜなら創作的な作品の形で「状況への怒り」を表すことにより、評論的な作品になっているからだ。

筆者が伝えたい事は以上である。この研究は単なる言葉の束としてだけでなく、もっといい社会・人生の名の下に、『禁色』の「恐怖」と舞踏の「暴力」がポジティブに受け取られてほしいという願いがこめられている。

## DAFTAR ISI

<b>HALAMAN JUDUL</b> .....	i
<b>HALAMAN PENGESAHAN</b> .....	ii
<b>HALAMAN PERNYATAAN ORISINILITAS</b> .....	iii
<b>PERNYATAAN PUBLIKASI SKRIPSI</b> .....	iv
<b>KATA PENGANTAR</b> .....	v
<b>DAFTAR ISI</b> .....	viii
<b>DAFTAR GAMBAR</b> .....	x
<b>DAFTAR LAMPIRAN</b> .....	xi
<b>BAB I PENDAHULUAN</b> .....	1
1.1 Latar Belakang .....	1
1.2 Pembatasan Masalah .....	7
1.3 Tujuan Penelitian .....	8
1.4 Pendekatan dan Metode Penelitian .....	8
1.5 Organisasi Penulisan .....	11
<b>BAB II PENDEKATAN DAN LANDASAN TEORI</b> .....	13
2.1 Hermeneutika .....	13
2.2 Teori Estetika .....	19
2.2.1 Jerzy Grotowski: Menuju Teater Miskin .....	24
2.2.2 Jean-Francois Lyotard: Konsep Seni Avant-Garde .....	27

<b>BAB III KESENIAN JEPANG: DARI YUKIO MISHIMA HINGGA SENI BUTOH</b>	29
3.1 Menilik Dinamika Kesenian Jepang Pasca Perang Dunia II	29
3.2 Yukio Mishima: Hidup dan Karyanya	34
3.3 Butoh, Hijikata dan Perjalanannya	37
<b>BAB IV TUBUH DALAM NOVEL KINJIKI DAN SENI BUTOH</b>	41
4.1 Novel Kinjiki yang Mendasari Estetika Tubuh Butoh	41
4.1.1 <i>Beauty and Ugliness</i>	42
4.1.2 <i>Youth and Aging</i>	59
4.1.3 <i>Life and Death</i>	72
<b>BAB V SIMPULAN</b>	92
<b>DAFTAR PUSTAKA</b>	95
<b>LAMPIRAN</b>	xii
<b>SINOPSIS</b>	xiii
<b>RIWAYAT HIDUP PENULIS</b>	xiv

## DAFTAR GAMBAR

Gambar 1. Berbagai varian ekspresi wajah Butoh.....	54
Gambar 2. Eksplorasi Butoh pada gerak perkembangan.....	69
Gambar 3. Eksplorasi tubuh sekarat dalam Butoh.....	84

## DAFTAR LAMPIRAN

Lampiran 1 Novel Kinjiki dan Seni Butoh Sebagai Seni Teror.....	100
Lampiran 2 Beberapa foto pertunjukan Butoh, kondisi Jepang pasca Perang Dunia, Yukio Mishima, dan poster pertunjukan Butoh.....	108